

平成 23 年度 校内研修(究)計画書

十和田市立北園小学校

1 学校の教育課題

| | |
|---------|-----------------------------|
| 教育目標 | 三本木開拓の精神に学び、郷土の発展に寄与する人間の育成 |
| <かしこく> | 創造力があり、未知を切り開く子ども |
| <やさしく> | 情操豊かで、意志の強い子ども |
| <たくましく> | 体が健康で、たくましい子ども |

本校の児童は、明るく元気で素直な子どもが多い。保護者は協力的で、教育に対する関心が高く、自分から進んで学ぶ態度と力をもつ子どもになって欲しいと願っている。

20 年度から始まった学びたいムや学習における機器活用・放送番組の活用の在り方に関する校内研修等の取り組みの成果として、学力検査の分析においては、どの学年、どの教科においてもほぼ全ての観点で全国平均を上回っていることから基本的な力は着実に身につけてきていると言える。自分の思いや考えをしっかりと言葉や図・表などで表現する力を育て、互いに高め合えるような練り合いの場を設定し、交流活動を充実したものにすることで、本校児童の学力は、更に確かなものになり、学び続けようとする意欲も高まるものとする。

児童に身につけさせたい「対話する力」を明確にし、指導計画や指導体制などを工夫しながら、よりよい考えに高め合える授業のあり方を模索した校内研修を行いたい。

2 本校の研修計画

(1) 研究主題

自ら考えたことをもとに、「対話する力」を育てる授業の追究
～身につけさせたい「話す力」「聞く力」を明確にした 交流活動を通して～

※本校の定義する「対話する力」とは

相手と向かい、自分の思いや考えをやり取りする活動。一方的な伝達ではなく、相手の思いや考えを受けて返すことを互に行いながら、会話を進めること。

(※ 相手:自分の心と、筆者、登場人物等も含める)

(2) 主題設定の理由

① 学習指導要領との関連

今回の新学習指導要領改訂のポイントの一つは、「表現力」の育成である。国際化・情報化社会において、共生し、主体的に生きるために、互いの立場や考えを尊重しながら「言葉で伝え合う力」を高めることは、きわめて重要である。

この伝え合いが成立するためには、相手や目的、場面等に応じて自分の思いや考えを適切に表現・伝達する力と共に、相手の立場を尊重しつつ言葉を通して考えを的確に理解する能力・

態度の育成が不可欠である。個々の考えが確立していることは前提であるが、この個々の考えが確かであれば深いほど「伝え合う」ことによって、内容が深まり、新たな価値を生むことになる。すなわち、「伝え合う力」と「考える力」の高まりによって、それぞれの個を高め合うことになり、お互いが学ぶ喜びを実感し、成就感を味わえる魅力ある学習が成立すると考えられる。これは本校の目指す「対話する力」と目指すところは同じものとする。

②児童の実態、学校や地域の課題との関連

平成22年度の学力検査や県の学習状況調査の国語の観点「話す・聞く」をみると、どちらも県の平均は上回っているものの、通過率は他の観点に比べて高くはない。昨年度の研修の成果は表れてはいるものの、自分の考えをそのままに言い表したり、話し合いにつながるような聞き方をしたりする点で、まだ改善の余地があるといえる。

学びを深めていくことは、交流活動の中でそれぞれの考えの特徴や有効性、共通性、関連性を比較検討し、より良い考えを導き出す活動であり、この活動によって児童は自分の考えを深め学習内容の理解をより確かなものにすると思う。

それ故に、よりよい対話を生み出す発問や他者との関わり合う交流活動における支援を工夫したり、話し合いでの言い表し方(書き表し方)等の表現の仕方を学ばせたりすることが重要である。

そこで、自ら話したり聞いたりすることの楽しさを味わわせるとともに、自分の考えをもとに、練り合い、より良い考えに高め合うことのできる「対話する力」の育成が課題であると考え、本研究主題を設定した。

③これまでの研究の成果と課題の関連

22年度の研究では、ペア、グループ、全体での交流の在り方や、交流の場における教師の支援の在り方や手立てについて研究を行ってきた。その結果、「児童による自力解決⇒考えを共有確認する交流⇒友だちの意見との関連性に気付かせたり比較したりして高め合う交流」⇒「振り返り」という学習のスタイルを確立した。

また、よりよい考えに高め合えるように、4つの練り合いの型(話し合いの視点)を設定することで、話し合いのねらいを明確にし、それぞれの型に応じた発問や支援の在り方を工夫した。その成果として、互いの考えを認め合うだけでなく、考え方の違いに着目したり、よりよい考えはどれなのか意識したりしながら交流活動に参加する児童が多くなってきた。

今後は、さらによりよい考えに高め合える交流活動になるよう、各学年における「話す力」「聞く力」を明確にし、一人一人の児童にそれらの力をつけ、交流をしたくなるような切実感のある発問や交流場面における発問や支援の在り方を研究し、児童の「対話する力」の育成に努めていきたいと考える。

(3)研究目標

より良い考えに高め合う「対話する力」を育てるためには、各学年で身につけるべき「話す力」「聞く力」を明確にし、発問や交流場面における支援の在り方を工夫することが有効であることを、実践を通して明らかにする。

学習活動の流れ

「対話する力を育てる場面」

| | | |
|------|---------------|--|
| 個の学び | 自力解決の場 | 自己との対話 心内対話 自分と教材や題材と 向かい合う |
| | 学習課題を把握する | |
| | 解決への見通しをもつ | |
| | 筋道を立てて考える | |



Ⅲ発問の工夫

| | | |
|-----------|--|---|
| 交流を通しての学び | 一人一人の考えを確認, 共有する場 | 他者との対話 ペア対話 2人での交流活動 グループ対話 4～5人での交流活動 全体対話 クラス全体での交流活動 |
| | ①相手意識をもってわかりやすく話す ②根拠をもとに話す ③新たな考えに気付く | |
| | 一つ一つの考えを比較・検討する場 | 考えを高められる の工夫 |
| | ①自分の考えと比較する | |
| | ②友達の考えの良さを取り入れようとする | |
| | ③より良い方法を追求する | |



| | | |
|-------|---------------------|---|
| 高まった個 | 自分の考えを振り返る場 | 自己との対話 心内対話 自分の考えの変容を 振り返る |
| | 交流を通して明確になったことをもとに | |
| | 自分の考えを見直したり再構築したりする | |

(4) 研究仮説

Ⅳおける支援③の工夫

(5) 仮説の検証に向けて

- ① 『身につけさせたい「話す力」「聞く力」を明確にし』
 考えを高め合える交流活動を行う上で、各学年において必要な「話す力」「聞く力」を明らかにする。
 - ・ 「話す力」「聞く力」の系統表を作成する。

- ・ 系統表をもとに学級の話し合いにおける問題点や課題を明らかにし、単元計画を立てる。
- ・ 授業における評価として活用する。
- ・ 「話す力」「聞く力」の系統表を改善する。

② 『発問』

子どもたちが「話したい」「聞きたい」「話し合いたい」という切実感や必要感、また知的欲求を喚起する発問を工夫する。

(※よりよい交流活動への導入としての発問)

- ・ 「自分の気持ちや考えを伝えたい」と思える発問
- ・ 「相手の気持ちや考えを知りたい」と思える発問
- ・ 「分からないことを聞きたい」と思える発問
- ・ 「自分が知っていることを教えたい」と思える発問

③ 『交流場面における支援の在り方を工夫する』

一方的な伝達ではなく、相手の思いや考えを受けて考えを高めていけるような交流活動になるように支援を工夫する。

- ・ 自分なりの考えの持ちせ方に関する支援
 - ・ 自分の考えを表現したり説明したりする方法に関する支援
 - ・ 交流グループ形態やメンバーの構成に関する支援
 - ・ 諸能力を高めるための活動を単元また授業の中にバランスよく配置
 - ・ 対話の時間を十分補償する 他
-